

■ 読売新聞社主催「大学生と考える、難病支援のカタチ」座談会に本学学生が参加しました

読売新聞社が主催する、RDD（世界希少・難治性疾患の日）特別企画「大学生と考える、難病支援のカタチ」の一環で行われた、神戸大学医学部附属病院（兵庫県神戸市）での座談会に本学の学生が出席し、その様子が読売新聞（大阪本社版）に掲載されました（2/24朝刊）。

座談会の様子等、詳しくは以下のURLからご覧いただけます。

■ 「あすモア」ホームページ

<http://www.yomiuri-osaka.com/asumore/>



私の薦める、私の一冊  Column.

物理学分野 教授 有本 收  
 鷲田清一・山極寿一 著 / 都市と野生の思考  
 インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2017）

「哲学者とゴリラの破天荒対談」との副題が付された対談集です。著者の一人、鷲田氏は哲学者。朝日新聞のコラム「折々のことば」でご存知の方も多いでしょう。「迷惑かけて ありがとう（たこ八郎）」を採り上げるなどは実に柔軟。臨床哲学という新たな分野を開拓中です。一方の山極氏は人類学・霊長類学者。学生時代に「京都の飲み屋で鍛えられた」後、「サルの糞を二万個近く洗い」、「一日中ゴリラの群れの中で暮らし、彼らの暮らしの作法と感性を会得して」きた人物です。Wild and Wiseであれ（野性的で賢くあれ）と若者を激励します。

前書きで鷲田氏は、「霊長類学と哲学、ともに国境とか文理の壁なんぞに怯むような学問ではない。なんのとらわれもないおしゃべりができる」と言います。例えばリーダー論について話が及んだとき、松下幸之助の語ったリーダーの3条件「愛嬌」「運が強そうなこと」「後ろ姿」を鷲田氏が紹介すると、「なんと！それはゴリラそのもの」と応じる山極氏。因みに、ゴリラのリーダーには、他者を惹きつける力と他者を許容する力の両方が必要らしい。なるほど。

本書では、家族の進化や、アートと言葉、自由の根源、ファッションの意味、教養の本質、AI時代の身体性など、9つのテーマを扱います。「cosmeticとは宇宙との対話である」という話面白いし、「動物にとって食は隠すもので、性は公に見せるもの。

それを人は逆転させ、そのとき最初のフィクションが生まれた。人間が共同生活を営むにはフィクションが必要。それを維持するための装置として家がつくられた。」などは人類学者ならではの見識でしょう。「大切なのは命の世話を一緒にやること」という言葉も心に響きます。

本書には、「人間は、類人猿との共通祖先から分かれて700万年、大切に育ててきたものがある。例えば食物を分配したり、寝場所をともにすること。そこに幸福の原点があるはず。今こそ、野生の思考と都市の思考を合わせて、人間の来し方行く末を論じなければ」との問題意識が通底しています。

一流の哲学者と一流の人類学者が互いに刺激し合いながら紡ぎ出す言葉は傾聴に値します。新しい発見と納得、そして疑問も出てくるはず。一度で咀嚼しきれないかも知れませんが、将来の自分と将来の社会を見据えて、何度も読み直し、考えを巡らすことをお勧めします。



※本書は入荷次第、図書館内の本誌推薦書コーナーに展示いたします。